

【ねがいましては】

平成14年5月27日

第146号

KYOWA SCHOOL

「当ってください」

このところ教室では、学校からの宿題をする子どもたちの表情から「いきいき」が影をひそめている事がわかるようになりました。

まず、年齢的なもの・・・明らかに学年が高い方が元気に乏しいのです。低学年になるほど「いきいき」があるのです。

兄弟で通うY君とK君、Y君はお兄ちゃん、毎日のように公園で遊んでいます。かなりリーダーシップのある様子で、仲間内でも人気があるようです。が、こと「勉強」・・・特に学校の宿題になると表情は一変します。

ここでは「そろばん」の子でも、「学習」の子でも、学校の宿題を持ってきてやってよい事になっております。宿題は学校の延長線上にあるもので、それを行う本人は「学校にいる気持ち」で取り組みます。つまり、学校での本人の授業中での「心」を引きずった状態で取り組みます。

私はその子の表情から、その子がいったいどんな気持ちで学校にいるのか想像します。

ここは塾、場所こそ違いますが、本人にとっては「やりたくない事」のワースト1なのです。気持ちの中では・・・「あー！早く終わらせたい」一色です。そんな気持ちで取り組むわけですから、これでは本当の意味の「勉強」とは、かなりかけ離れた気持ちになってしまいます。宿題から本来の「学び」が身につくはずがありません。

もうひとり、弟君。彼は実に何事にも「のびのび精神」で取り組みます。わからなければ、「わかりません」と、元気に持ってきます。ポイントはここにあります。元気に持ってくる気持ち。

わからないから聞きに行く。きわめて単純明快な理論です。この当たり前な気持ち、高学年になればなるほど薄らいでいきます。・・・元気がなくなります。

なぜ低学年より高学年の方がのびのびしていないのか。答えは簡単・・・学校での授業で彼らはまわりから「罵声」を受けます。真剣に考えて答えても、それが違っていれば、何処からともなく聞こえてくる「笑い」「ひそひそ」・・・もしこれがなくて、まちがえても「拍手」「立派」なんて聞こえてきたら、きっと今でも・・・「のびのび」なはず。

競争教育が作り上げた「功罪」の中の「罪」なのです。

私は、このごろ特に大きな声で訴え続けている事があります。

「間違えたっていいじゃないか。精一杯考えて間違えたのなら、それで100点だよ。」

「ここは、学校じゃないんだよ。誰も君の事を笑ったりする子なんかいないんだよ。」

私は、このように勉強に元気がなくなってしまった子達を「学校病」にかかっているんだよ。と言っています。

間違える事は悪い事なんかじゃない。間違えた子を罵（ののし）る子こそ、罪なのだと。

私は夢見ています。間違えても間違えても、またまた間違えても、根気良く元気に考え直して来る。そんな子たちで溢れている教室を。早くこないかな、くりたのランチ講習「夏」。

ねっ！くりランファンの皆さん。勉強って楽しいよね！

6月の予定

3日（月）珠算・暗算検定合格発表

くりくりクラブ・・・別にお手紙お渡しします。

CAMP2002決定・・・8月6日（火）～10日（土）4泊5日、案内書お渡しします。楽しさは、行った子に聞いてください。また、2001CAMP CD-ROMも、お貸しします。100点満点自信あり！